木村彰一先生の思い出

平 川 祐 弘

木村彰一先生は複数の外国語を駆使することのできた日本の数少ない学者である。戦中派世代であるにもかかわらずどうしてあの水準まで外国語が習得できたのかと不思議な気がする。あの水準までといったが実はそれがどれほどの高さなのか私には見当もつかない。東大言語学科卒業生の中でも木村先生ほど語学の才に恵まれた人は滅多にいなかったのではあるまいか。それから大事なことは先生は philology だけでなく literature も解されたことである。外国語の達者な先生は外国女性にももてたにちがいない。

先生は私の『和魂洋才の系譜』を読んで「平川という人はよほどフランス語に深く漬かった人だな」と日本語の文体や叙述から私の背後の能力を見通す感想を洩らされた。私がその書物でもっぱら鷗外のドイツ体験を論じていたにもかかわらずである。それを聞いたときは先生の文体に対する感覚の鋭さに驚き，かつ嬉しかった。その前に「あなたはフランスに長い人だな。堀悌吉君を思い出す」と山梨勝之進大将にいわれて堀とは一体誰だろう，と思ったことを思い出した。その後，木村先生はご機嫌がいいと私に対しフランス語で話しかけられた。もっともそれは初歩的な会話であったが。

先生とはイタリア語について話したこともある。ドナルド・キーン教授が駒場に来て翻訳について話した。そのとき黒板に「翻訳者は裏切者」を意味する traduttore, traditore を誤って traduttore, tradittore と書いた。木村先生はイタリア語の基のラテン語の知識から誤りに気がつかれたらしい。「この男は教養がありませんな」と私の耳元でいわれた。キーンはアメリカでも同じ主題で何度も講演したはずだが，誰も誤りを指摘しなかったらしい。その後コロンビア大学から出されたキーン教授の退官記念論文集で「訳者は役者」だとする論にもその間違いはそのまま出ている。英語人にはイタリア語や日本語の撥音の聴き分けは難しいのだろうか。

木村先生は戦後北大に赴任し露文科を創設したのちいちはやくアメリカへ留学，一九五六年に東大に移り，駒場のロシア語教室と教養学科ロシア分科を六六年に創り，しかもそこに単にロシア語だけでなくもう一つスラヴの言葉ができる人々を集めた。これは非常な学問的見識である。というのは一国一言語の専門家はとかく一辺倒になり研究対象国によかれあしかれのめり込むからである。当時はソ連へ留学することは難しい時期で先生はご自身ポーランドへ洋行された。私は東外大へ非常勤で教えに行ってイタリア語学科とフランス語学科の間に縦割りの壁が高く厚く両者の間で学問的交流がないことに憮然としたことがある。外国語の専門家やとくに比較研究者は複数の外国語が堪能でなければいけな

いというのが私の意見だ。二十一世紀の比較文学が，日本比較文学会にせよ東大比較文学会にせよ，およそ低調なのは，その役職にある人にそれだけの基礎的な学問的な能力が備わっていないからだと私は観察している。そうした学問的 prerequisite を要求するだけの学問的厳しさが学界に欠けているからである。しかし人間の能力には限りがある。こんな偉そうなことをいう私は実はロシア語はできない。それでもロシア語関係者とつきあいがあったのは次のような事情からで，それでこんな一文も書かされる羽目となった次第だ。

私は長く海外で暮らして一九六四年，満三十二歳九か月の時にようやく駒場の比較文学比較文化大学院課程の助手となり，その職を五年三か月務めた。その比較の大学院ではロシア語第一志望の大学院生も受入れていた。池田健太郎もその一人で，山本（川端） 香男里も別の一人である。山本は教養学科フランス分科の出身だがいちはやくスラヴ圏の比較文学に注目していた。そのような駒場におけるロシア語志望の学生の受入れは一九七二年，本郷にロシア文學科が――これまた木村先生の手で創られるのだが――それまで続いた。

当時の助手の出勤日は週三日で火木金と私は精励恪勤した。火曜は主任が昼休みをはさんで二コマ教える日。木曜は会議のある関係で多数の教授が見え，また教養学科の助手会のある日。金曜は午后から研究室に来る日。私は水曜と金曜の午前はよそで非常勤で教えていた。それだから私が『神曲』翻訳に専念できたのは土日月と夏休み秋休みが主であった。助手としての私は英・独・仏・伊を第一外国語とする大学院生とは学問的にもつきあつたが，ロシア語の学生とは距離があった。沓掛良彦などが私がロシア語専攻の学生に冷たいと苦情を言っていると嘱託の今井恵子さんが注意してくれた。沓掛が私に喰ってかかるのはそれはまあ性格の問題だ。その私が駒場に来ない水曜に木村彰一・寺田透両先生のロシア語の演習はあったのである。

ところで両先生は共に一九一五年の早生まれ，同じ一九三七年の東大卒だが，成蹊出の木村先生より一高出の寺田先生の方が自信というか鼻柱が強い。しかし寺田氏のロシア語は独学である。その読みにはさぞかし誤りも多かったであろう。そもそも第一外国語のフランス語にしてからが寺田先生はよく間違えた。木村先生は寺田先生のロシア語に顔をしかめて私に寺田批判を洩らされたが，しかし寺田氏は学生に人気があった。私は助手として五年間，入試の口述試験や修士論文の審査に立会って，審査する教授たちの発言をまことに興味ふかく聞いたが，寺田氏の意見は確かに鋭い。しかししばしばバランスを失していた。それに対して氷上英広，木村彰一，佐伯彰一の諸先生は判断のバランスがよくとれていた。

ところで木村彰一先生は戦前戦中の本郷のドイツ文学科主任であった木村謹治教授の長男である。大学行政や新学科創設に手腕を発揮し円く収めて見事だったのはその血筋のゆえだろうか。それともそのバランス感覚ゆえだろうか。私は後者ではないかと考えてい

る。その感覚は政治面では『朝日新聞』が説く平和主義程度で「ジャーナリズムは時の政権に楯突いてバランスをとればよい」式の考えだった。だから先生はもちろん急進左翼ではないが――それだから露文学科の創設責任者をまかされたのだろうが――さればといって木村汎のような国際関係論の現実主義的スラヴィストに対しても警戒感があった。私はそれは戦中派のアレルギー反応だなと感じていた。

では肝心の学問の筋はどうだろうか。

私が大学院助手の時は第一代の島田謹二主任はすでに退いて三年，富士川英郎教授が主任だった。菊池栄一先生は長老格で私も恩顧を蒙った。その菊池先生は同じ秋田の出身で木村謹治教授をゲーテ学者として深く尊敬していたが，私は謹治教授の学問について詳しくは知らないが，それでも「生きている人間をＸ光線で覗いて，その骸骨の話ばかりをしているようなものだ」という竹山道雄の木村謹治批判に共感する節がある。そして同じゲーテ研究なら菊池先生のように具体性に富んだ研究の方が滋味がある，と感じていた。学問は抽象化し概念化することで生気を失うことが多い。ドイツ風学問の欠陥というか観念的・思弁的学問の欠陥であろう。

しかし木村彰一先生は父君の学問を尊敬していた。世間に批判のあることを耳にされていたからだろう，「立派なものですよ」と弁護された。私はそれなのに失敗をやらかした。駒場の比較の大学院にはロシア文学が主専攻で後にドストエフスキーやニコライの研究で国際的に名をあげる中村健之介などの大学院生もいた。彼らに発表の場を与えるべきだ。それで一九六八年に『比較文学研究』はロシア文学関係の特集号を出すこととした。巻頭に島田謹二教授の力作「芥川龍之介とロシヤ小説」が掲げられた。木村彰一先生は『エフゲニー・オネーギン』の一節の解釈を寄稿された。ところがその欧文の裏表紙に Kimura K. と誤って印刷してしまったのである。前後に Shimada K.と Nakamura K.というイニシアルが並んだために印刷所が間違えて三人とも K としたのだろうが，私が校正の際 Kimura S. と訂正しそびれたのは父君のお名前の謹治の K が私の脳裡にあったせいにちがいない。先生はひどく嫌がられた。

木村彰一先生は一九八六年に亡くなられたが，その翌年に編まれた『魅せられた旅人――ロシア文学の愉しみ』（恒文社）などから察すると，謹治先生風の学問は継がれなかったようである。というか翻訳，辞典などの仕事を多くされた。『イーゴリ遠征物語』の専門的注解がロシア本国でどのように評価されているのか私は知らない。それでいてこんなことを言っていいか多少ためらわれるが，木村彰一先生はご自分の学問的アイデンティティーを証するに足る御著書をついに書かずに終わられてしまったような気がする。まだ発表されていないライフワークが実はあってそれが日の目を見ることがあれば，それこそすばらしいに相違ないが。

先生は世界文学全集などの編集委員にも名を連ねられた。翻訳をする際に先生は鷗外の

翻訳『諸国物語』を範とされた。あらかじめ読み返す，といわれた。『和魂洋才の系譜』は鷗外を軸に据えた博士論文だから，鷗外は共通の話題となり得たのである。さらに私事というかやはり公事だから述べるが，木村先生は実はその論文審査の主査でもあった。先生は旧帝国大学の卒業だから人間四十代の若さで文学博士などになるべきではない，と思っていられたかもしれない。新制東大の一回生の私が自分の著書を博士論文として提出したことを煩わしく感じられもしただろう。その時の論文審査は今では想像できないほど略式で時間も短く，全くの形式だった。私が慎重を期して誤植や誤記を訂正した第三版の書物を提出したのが良かったのかもしれない。なお印刷物形式で論文を出してもよいことは一九六八年以後は西洋でもみとめられることになっている。質問は斎藤光教授が「平川さんは一体何か国語ができるのです」というのが唯一の質問に近い発言であった。（斎藤先生は外国語科主任としてその直後イタリア語を東大の第三外国語とし，その教育責任者に私を指名した）。その後の私が各国の大学で教えることを得たのはひとえに博士号という国際的に通用する teaching license があったお蔭である。

だが一九七四年当時の本郷文学部は大学紛争後であったが，それでもなおやすやすと学位を出したくない気分もあったのだろう。人文科学研究科委員会で木村先生が審査結果を報告した時に，「大和魂」について『今昔物語』などに出て来る使用例から「世才とか常識的思慮判断」とするのが正しいとする解釈にこだわる異論が評決の後に雑談のように出た由である。木村教授はその秋山光和教授の指摘を私に直接は言わず私の同僚の芳賀徹に伝えた。その方が正しいとするかのような口吻だったと芳賀がいう。私は何を言うかと思い，『比較文学研究』二十七号に「ウェーリーの『大和魂』解釈」という一文を寄せた。それはそのような異論に反駁し誤解を解くためで，日本人の「和魂」の内実についての認識は「和魂漢才」に類した表現が作られた後も必ずしも深まったわけではなく，「和魂」の把握は他者との関係における自己認識であり，その内容は辞書に出ているような意味で固定しているわけではなく時代とともに変化することを述べたのである。「スラヴ魂」とても他者との関係における自己認識でその内実は時代とともに変わるだろう。その辺は木村論文集に「ゲルツェンと西欧」について書いた土谷直人に聞きたいところだ。西欧が意識されるからスラヴも自覚されるのである。

木村先生は氷上英廣先生の後をついで一九七二年から七五年まで駒場の比較文学比較文化課程の主任を務められた。先生は私を「比較の大学院のイデオローグ」と呼んだ。氷上主任のころから大学院を教養学部語学教室全教員のローテーションで担当させよ，というドイツ語教室とフランス語教室の突き上げが激しくなって，それが組合闘争のごとき様を呈した。苦々しい限りで，そんな要求は学問的必然性に欠けているから私は反対したのだが，私のような意見は少数派で，木村先生にそれ見たことかと体よく円く収められてしまった。私は新制大学出身者については博士号を持つ者だけが大学院を教えるという風に

すればよいと考えていたのだが，芳賀徹などもまだ学位論文を提出していない。となるとそうもいかなかった。

木村彰一先生の次は佐伯彰一先生が主任に推された。衆目の一致するところで，なにも私が工作したわけではない。私は学問に忙しい人間で，根回しに電話を掛けてまわるような時間的余裕はない。それでも私が「彰一から彰一へ主任が代り」と皆の前で挨拶したものだから，今度は名前を間違えたわけではないのに，佐伯先生から「そう言われるとなんだが自分のアイデンティティーが傷つけられたような気がする。あなたはキングメーカーだ」などといわれてしまった。佐伯氏は人物眼も鋭い人で比較の主任を八年務め，その後に芳賀，平川，小堀と続き川本皓嗣が主任となるや川本の目の前で「比較も島田先生から直接習った世代がいなくなるとこの先は駄目になるな」といった。川本主任が「まさか」と反論し，私に助けを求めるように目を向けたが，私は内心で佐伯説はその通りだと思っていた。そのポスト木村・佐伯時代に比較から出たスラヴィストに沼野恭子や加藤百合がいる。

川端香男里は北大から東大駒場へロシア語講師として戻り，さらに本郷へ移り，木村先生の跡を継いで露文科の主任となった。木村教授の定年に際し先生の学風を反映した『ロシア・西欧・日本』という比較文化史的なひろがりのある標題の下に木村彰一教授還暦記念論文集を編んだ。この題は切れ者の川端の発案にちがいないが，駒場の比較の伝統を継ぐものであることは題字が氷上英廣筆であることからも察せられよう。私はそれで西欧対ロシアと西欧対日本の関係には共通する心理があることを想い，「西欧化の社交界――プーシキンの『ロスラーヴレフ』と芥川の『舞踏会』」を寄稿した。私がロシア語専門家でないためか，他の執筆者の批評はまったく耳にはいらなかった。平川論文に反応した――それも否定的に反応したのは篠田一士で，篠田は日本を他の国とひとしなみに外から見る習慣がおよそない文芸評論家であると見えて，そんな並行例は無理だ，という頭からの拒絶反応であった。

私は自分の論文のかなり多くは外国語版もこしらえてきた人間で，「西欧化の社交界」も後に“Rokumeikan:the Europeanization Fever in Comparative Perspective”というペーパーに仕立てて，ロサンジェルスのアジア学会で読み上げたことがある。プリンストンにいたときのことだが，大学図書館で『ロスラーヴレフ』の英訳が見つからず，町の図書館に寄ったら見つかった。発表したのは一九七八年の十二月のことだが，キング牧師が公民権運動を盛りあげた後だった後にもかかわらず，それでも「黄色人種の男が白色人種の女と踊るなど気持が悪いではありませんか」というコメントを抜け抜けと言う米国白人の女学者がいた。そのときの私に対してアメリカ国務省の元役人が「あなたはその場で rebuttal ができるな」といった。私は知らぬ間に英語でも反論できるようになっていた。私の発表やディスカサントとの応酬を聴いて「これは面白い日本人が来た」と思った学者がいたらしい。

私はそれが縁で電話が突然かかりハーヴァードへ講演に招かれた。

こんなことを書くうちに思い出した。「西欧化の社交界」の論文についてはなお後日談がある。ベルリンの壁が崩壊する前の年，エディンバラで開かれた全欧日本学会に私は参加した。開会の前夜，ソ連の女性の日本学者が初対面の私に向って英語で自国の現体制をしきりと論難する。そのくせ翌日の発表は昔ながらの社会主義圏に固有の語彙を使って紋切り型な話であった。だが本人投獄されたこともあるらしい。『枕草子』にも関心があるといった。それだからその女性に私は英文の Rokumeikan 論文の抜刷を渡したが『ロスラーヴレフ』は読んだことがない，という。こんなたよりない様ではとても反応は期待できまいと思って名前もよく覚えずに別れたが，それから一，二カ月経った後，東大駒場の八号館の三階で私は「平川先生」と呼びとめられた。ロシアから帰国したばかりの若い人が（東大の助手だろうか），いきなり件の女学者が平川先生の論文を激賞していましたという。そういわれて，驚きかつ嬉しかった。なおその論文は私の英文著書 Sukehiro Hirakawa, *Japan's Love-Hate Relationship with the West* (Folkstone: Global Oriental, 2005) に収めてある。この本はいまは Brill から出ている。

木村先生は学士会館で古典語辞書作製の打合せの席上，突然亡くなられた。そううかがったときは学者にふさわしい最期と思ったが，七十一歳というお年は早過ぎる。今の日本の文系の人は六十代はもちろん七十代でも八十代でも実り豊かな仕事ができる。歴代の比較の主任は東大退官後に著わした書物によって学者としての自己証明をし，かつその学問の soundness を立証している。露文学科の歴代の主任はどうなのだろう。私はどうしたことか傘寿を越えても忙しい。複数の外国語を用いる人は，ある言語の前線では停戦状態になろうとも他の言語の第一線に出て戦うこともできる。文学の戦線でなくて歴史の戦線で筆をとることもある。

東大教養学部では研究対象国のお国柄を反映してアルコールの摂取量も変るという話だ。フランス語教室では学内の科会のあとで渋谷へ飲みに行ってそこで外(そと)科会なるものを開くのが常で，人事もその辺で決まったらしい。私は葡萄酒は好きだがその外科会に参加したことはなかった。当初は駒場第一の酒豪はフランス語教室に揃っていた由だが，ロシア語教室が開設されるに及んでその座を譲ったとの評判であった。

木村彰一先生はお酒が好きであった。先生はそれだから私の次の比較の助手の杉田弘子さんとはすこぶる調子があったらしい。杉田さんが私に言った，「木村先生が呆れていましたよ。『“渋谷へ行きましょう”と平川が言うから飲みに行くつもりで一緒に行ったら，平川はなんとコーヒー店に入ってケーキを注文した』と笑ってらした」。私は外で酒席を楽しむ習慣がない。そんなさっさと家に帰ってしまう私をつかまえて，木村先生はふと思いもかけぬことを私に洩らされたこともある。

「私は死ぬとカトリックにさせられてしまいそうだ」

そしてはたしてその通り先生のお葬式はカトリックの教会で行なわれた。その際の弔辞に類した文章は今回の文集にも載るだろう。私が記憶しているのは葬儀の際に黄色い靴を穿いている男がいたことで「あいつは実にいい奴だがやはり非常識だ」と思った。そんな黄色がいまも目に浮ぶ。